

ネイチャー・シアター・オブ・オクラホマ
+ エンクナップグループ
『幸福の追求』

Nature Theater of Oklahoma + EN-KNAP Group
“Pursuit of Happiness”
8.3 Sat – 4 Sun

名古屋市芸術創造センター
Nagoya City Performing Arts Center



情の時代
あいち
トリエンナーレ
2019
AICHI TRIENNALE 2019:
Taming Y/Our Passion



Photo: Andrej Lamut

パヴォル・リシュカとケリー・カッパーの男女2人によるユニット、ネイチャー・シアター・オブ・オクラホマ。その劇団名は、カフカの小説『失踪者 (アメリカ)』の主人公が向かう最終目的地「オクラホマ自然劇場」に由来する。2006年の結成以来、作品ごとに自らの芸術的限界、それを受け取る観客の限界 にチャレンジしており、その独特の脱力系パフォーマンスは、世界各地でカルト的な人気を誇っている。

アメリカ合衆国の建国理念の一つ「幸福の追求 (権)」をタイトルに掲げる本作は、スロベニアのダンスカンパニー「エンクナップグループ」との製作・出演によるもの。鍛え抜かれたダンサーたちが繰り広げるのは、西部劇のパロディ。仰々しい身振りと言語調のセリフが滑稽さを加速させていくその先に、トラUMP以後のアメリカが露わにした誇大妄想とその空虚さが浮かび上がる。

The Nature Theater of Oklahoma is a performing arts group under the direction of Pavol Liska and Kelly Copper. The name is derived from “The Nature Theater of Oklahoma,” the final destination that the protagonist of Kafka’s novel *The Man Who Disappeared (Amerika)* is heading toward. Since its formation in 2006, the group has been challenging its own artistic limits, and the limits of their audience, with each and every performance; their unique extreme performance style boasts a cult-like popularity around the world.

Pursuit of Happiness (taking its title from one of the founding principles of the United States of America), the work to be staged for Aichi Triennale 2019, is commissioned and performed by, internationally active Slovenian dance company EN-KNAP Group—a parody Western, performed by highly trained dancers. The exaggerated gestures and literary style of dialogue bring to the fore both the emptiness of the United States of America, and the megalomania exposed since Trump’s inauguration.

ネイチャー・シアター・オブ・オクラホマ

2004年結成

ニューヨーク (米国) 拠点

パヴォル・リシュカとケリー・カッパーが主宰。多数の受賞歴を誇るニューヨークのアート／パフォーマンス集団。「アンサンブル」として初めて共同制作したダンス作品『Poetics: a ballet brut』以降、「作り方がわからない作品を作ること」をモットーに、自らを不可能な状況に置き、自身の無知や違和感を出発点に創作を展開。その場にいる全員が当事者であることを要求するような不穏な状況を提示する作品づくりを目指してきた。身の回りの既製品、ファウンド・スペース (既存の場所)、ふと耳にした発言、観察から見出されたジェスチャーといった素材を過剰なまでに形式化する手法と、並外れた努力によって生み出された彼らの作品は、パフォーマンスの延長にある日常の現実や私たちが生きる世界への認識を変容させてしまう。

Nature Theater of Oklahoma

Founded in 2004

Based in New York, USA

Nature Theater of Oklahoma is an award-winning New York art and performance group under the direction of Pavol Liska and Kelly Copper. Since *Poetics: a ballet brut*, our first dance piece created as an ensemble, Nature Theater of Oklahoma has been devoted to making the work we don’t know how to make, putting ourselves in impossible situations, and working from out of our own ignorance and unease. We strive to create an unsettling live situation that demands total presence from everyone in the room. We use the readymade material around us, found space, overheard speech, and observed gesture, and through extreme formal manipulation, and superhuman effort, we affect in our work a shift in the perception of everyday reality that extends beyond the site of performance and into the world in which we live.

主な作品発表・受賞歴

- 2019 『Die Kinder der Toten』ベルリン国際映画祭、ベルリン (ドイツ)、国際批評家連盟賞受賞
- 2018 『No President』デュッセルドルフ (ドイツ)
『Die Kinder der Toten』ネストロイ賞、ウィーン (オーストリア)、ネストロイ特別賞受賞
- 2017 『Deutschland 2071』ケルン (ドイツ)
- 2016 『Pursuit of Happiness (幸福の追求)』リュブリャナ (スロベニア)

Selected Works & Awards

- 2019 *Die Kinder der Toten*, Berlin International Film Festival, Berlin, Germany, International Film Critics Prize for Best Film
- 2018 *No President*, Dusseldorf, Germany
Die Kinder der Toten, Nestroy Prize, Vienna, Austria, Nestroy Special Prize for Theater
- 2017 *Deutschland 2071*, Cologne, Germany
- 2016 *Pursuit of Happiness*, Ljubljana, Slovenia

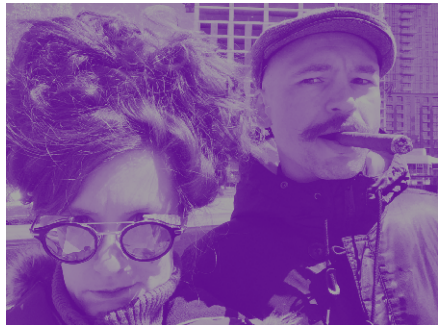


Photo: Pavol Liska and Kelly Copper self-portrait

EN-KNAP

エンクナップグループ

2007年結成

リュブリャナ (スロベニア) 拠点

世界的に有名な振付家、ダンサー、イストク・コヴァチが主宰するスロベニアで唯一の常設コンテンポラリーダンスカンパニー。突出した才能のダンサーたちが結集したこのカンパニーは、2009年からリュブリャナ市のモステ地区近郊にあるシュバンスキ・ボルツィ文化センターを拠点に活動。10年前の設立当初から、ジャンルを問わず国内外の振付家、演出家と創作を行い、コラボレーターは30人以上。レパートリーには長編 26作品のほか、ダンス映画などがある。スロベニア国内で年間50ステージ以上を上演するほか、定期的に海外ツアーも行なっている。

EN-KNAP Group

Founded in 2007, Based in Ljubljana, Slovenia

EN-KNAP Group, led by its founder, the internationally renowned choreographer and dancer Iztok Kovač, is the only permanent contemporary dance company in Slovenia. Since 2009, this ensemble of remarkable dancers has been based at the Španski Borci Cultural Centre in the Ljubljana-Moste neighbourhood. Since its establishment ten years ago, EN-KNAP Group has worked with over 30 Slovene and international choreographers and theater directors of aesthetically diverse backgrounds, and created a repertoire of 26 full-evening stage works and a dance film. In addition to making over 50 domestic appearances per year, the company regularly tours internationally.

パヴォル・リシュカ & ケリー・カッパー

「芸術難民」が表現する、滅亡したアメリカン・ドリーム

岩城京子

演劇パフォーマンス学研究／演劇批評

ネイチャー・シアター・オブ・オクラホマ(以下、NTO)のふたりは、米国の「芸術難民」だ。ニューヨークのクイーンズを拠点に活躍すると経歴には記されるものの、それはほぼ偽りに近い。ウィーンの国立ブルクテアターで出世作『ライフ・アンド・タイムス エピソード1』が2009年に初演されてからのち、かれらは家猫に会う暇もないほど、その住まいにとどまらない。むしろ旅芸人のごとく、ベルリンのヘーベル・アム・ウーファー (HAU) 劇場やグラーツのシュタイヤーマルクの春芸術祭など、欧州実験劇場等を拠点に世界を飛びまわってきた。いや、訂正する。「主に、米国を除く世界を飛びまわってきた」と言ったほうが適切かもしれない。つまりかれらは芸術家としての世界的成功と引き換えに、アメリカの芸術難民になったのだ。

米国ではいまだ、スタニスラフスキー・システム(つまり感情移入的演技)を金科玉条としてかかげる演劇作品が大半を占める。感動したり、感激したり、感涙したりすることが、良くできた演劇の条件とされる。ひるがえってNTOは、最新作『No President』(2018年)でスタニスラフスキーをむしろ槍玉にあげていた。かれらにとっては役者の深層心理を深めることよりも、役者と役者のあいだ、役者と観客のあいだ、あるいは舞台と社会のあいだで生成されるオンタイムな想像力のほうがずっと重要なのだ。心理よりも関係性、個人よりも社会性。つまりNTOの作品は、はなから米国向きじゃないわけだ。

しかも世界ツアーを本格的にはじめたのは、リーマン・ショック翌年の2009年から。そこからの10年間で、ネオリベラル資本主義の象徴である米国は「世界の仇敵」として罵られるようになって

た。すると今度は旅先で、米国人である自分たちを弁明しなくてはならない。芸術的に故郷を喪失しつつも、芸術家としては米国を語らざるをえない。そんな分裂症的生活をつづけたあげく、かれらは『ライフ・アンド・タイムス エピソード9』を創作しおえた2015年に、なんだか「力尽きてしまった」(カッパー)と素直に明かす。

「ライフ・アンド・タイムスのシリーズを創作しているときは、そのプロジェクトに関わる俳優たちを喰わせるために必死でした。かれらに職を与えつつけるため、給料を払いつづけるために、作品を創りつづけていた。でもそれがだんだんと重荷になり疲れてしまった」(リシュカ)。「だからクリエイターとしてもういちど、創造する幸せを感じたいと思って本作の題名をつけたんです。わたしたちにとっての幸福はなんだろう、と。アメリカ独立宣言に幸福追求権の一文が記されているという話は、あとから上乘せされたアイデアですね」(カッパー)

芸術行為に意味はあるのか。そんな根源的問いにぶちあたったかれらの悩みを、本作では劇中登場する舞踊団が代弁する。この舞踊団はなぜかNATO軍がイラク空爆をつづけるバグダッドへと巡業に向かう。戦場での公演。弾丸や手榴弾をかわしながらの死の舞踊。そしてダンサーという名の市民たちに口を挟む余地をあたえず、独裁的に巡業命令を下す団長は「バグダッドは俺たちを必要としている。全世界はバグダッドを必要としている。故に、全世界は俺たちを必要としている」という、論理が破綻した誇大妄想的結論に至る。生きる意味なんて、そもそもないのだ。でもその生にむりやり特別な意味を見出そうとするなら、どこぞの大統領や身近な首相のように無辜の市民

を犠牲にしても屁とも思わないエゴマニアになるしかない。芸術家としての実存的危機と、アメリカの国家存亡の危機が、二重螺旋として絡みあい、不安と暴力まみれに疲弊した世界が本作では炙り出されてくる。

NTOは『ライフ・アンド・タイムス』シリーズでは、16時間にもおよぶ友人との通話録音を、一字一句変えずそのまま脚本として書き起こす「ファウンド・テキスト(既成文章)」という創作法を採用していた(もちろんこの用語は「ファウンド・オブジェクト(レディメイド)」のもじりだ)。だが脱力系口語演劇がNTOの代名詞となりつつあることを不本意に思ったリシュカは「自分たちにとって理不尽なほど難易度の高いことに挑戦しよう、失敗を楽しもう」と、本作の製作にとりかかったという。確かに、いきなり未知のスロベニアのダンス・カンパニーとコラボレーションすると聞いたときは耳を疑った。しかもNTOのふたりは、今度は「ファウンド・テキスト」ではなく「ファウンド・シチュエーション(既成状況)」をエンクナップ・グループのダンサーたちに与えることから創作を開始した。

「アメリカが他者の視線から説かれる、映画の既存場面、小説の既存文献から引用するかたちでクリエイションをはじめました。例えばカフカの『失踪者(アメリカ)』は、アメリカに一度も行ったことがないカフカの目線から綴られていますよね。ドイツの冒険小説家カール・マイは、ヨーロッパで西部劇を流行らせました。またご存知のようにイタリアの映画監督セルジオ・レオーネは、『荒野の用心棒』などのマカロニウエスタン映画を、すべて旧ユーゴスラヴィアで撮影しました。こうした他者から見たアメリカの状況を、スロベニアのダンサーたちに模倣してもらうことにしたのです」(リシュカ)

最終的に、大多数が英語話者でない本作のパフォーマーたち(スウェーデン、ハンガリー、スロベニア、ベルギー、クロアチア、英国の混成チーム。編者注:日本公演は異なる多国籍混成チーム)は、西部劇の身振りをマスターしつつ、噛みタバコを口に含みつつ、一九世紀米国文学のような難解なセリフを発話する、という三重苦を課せられることになった。

「戯曲は、エマーソンやソローなど米国の超越主義文学者たちに影響を受けて執筆しました。かれらはアメリカの芸術とは何かをつねに模索していた人たち。その問いに、私たちは深く共感します。また言語に関しては、いまはあらゆる言語がなるべく消化不良を起こさない簡単な文字に書き起こされますよね。インスタグラムから政治まで、シンプルな言葉が勝利している。私たちはその流れに抗おうとしたのです」(リシュカ)

内容と形式のダイナミックな不一致は、かれらの常套手段のひとつだ。たとえば『ライフ・アンド・タイムス』シリーズでは、だらだらと句読点もなくつづく退屈な口語台詞を、パロック・オペラ、ブロードウェイ・ミュージカル、マスゲームの組体操、モノクロ映画、へた上手アニメーション、といった多種多様な形式を用いて娯楽的に表現してみせた。この対位法的な表現法は、本作でも顕在だ。前述したように内容的には、一触即発で拳銃が抜かれる血みどろの西部劇とその延長にあるバグダッドの死戦場が喜劇的に描かれているものの、形式的には、静謐な一九世紀文学と無機質なコンテンポラリー・ダンスの合わせ技である。そしてそのすべての基底に、米国批判及び自己批判の毒牙が潜んでいる。どのようにリハーサルを進めたのか、まるで想像がつかない。

「マカロニ・ウエスタンのような設定にしようというのは、最後の最後まで決まりませんでした。それはパヴォルがたまたまロバート・ウォーショーの『西部の人』や『悲劇的英雄としてのギャングスター』といった米国文明批判作品を読んでいたことで、忍びこんできた要素なんです」(カッパー)

「最初にダンサーたちの振付が決まって、そのあとにセリフを上乘せしていった感じですね。言葉、動作、音声、視覚といった作品の構成要素が、合致する必要はまったくありません。どちらかという、各要素の齟齬を楽しめるように作ったと説明したほうが正しい」(リシュカ)

結果的に、暴力を為しつつソローを語る幸福の追求のための物語、という確かに消化に優しくない、いびつな作品に仕上がった。でもこの暴力と幸福とくだらなさのいびつな共依存状態こそ、現代社会のしかるべき表象なのかもしれない。世界

の暴力が加速すればするほど、人びとはそれを
斥けるかのように、美味しいケーキや他愛もない
お笑いをインターネットで検索しつづけるのだから。
「現実しりぞは小説よりも奇なり」という常套句が
現代では手垢まみれの常識となってしまったことを、
アメリカ人であるふたりは嫌というほど知っているのだ。

「本作では小道具で拳銃を使うのですが、ニューヨーク公演中はその小道具を金庫にしまっておく
必要がありました。もし小道具を俳優たちが持ち
出したら、街で警察に捕まると言われたんです。
これは、とても奇妙な話です。小道具の拳銃は
金庫にしまわれていて、ひとたび外に出ると米国人
の誰もがリアルな拳銃を持っているのだから」
(カッパー)

最終的に本作は、資本主義がすべてに勝利する
ことを示唆して終わる(具体的にどのように表現
されるかはここでは伏せておく)。芸術も、政治
も、宗教も、戦争も、人道的支援も、真実さえも、
すべては金に勝つことができない。人が人として
認められる条件は、理性があることでも、愛を語
ることでも、死を形而上的に解することでもなく、
もしかすると金を崇めることなのかもしれないと

さえ思えてくる。

「たとえ自分たちは舞台を商品として売るため
に作っていたとしても、私たちアーティストはま
わりの人に自分たちの夢を信じるようにしむけな
ければならない。私たちは夢の実現のためにやっ
ているんです、という物語を語ってあげないとい
けない」(カッパー)

「しかも、その物語が真実であるかどうかは問
題じゃない。トランプのような政治家でさえ、真
実ではなく夢を語ることで、ある種の人々に安心
を与えています。私たちもそれと同じで、自分た
ちの夢を語り、それを他の人にも一緒に生きるよ
うにと頼むわけです。そこには避けられない権力
関係が生まれます。それが資本主義時代のアー
ティストなんです」(リシュカ)

アメリカを批判し、トランプを糾弾し、資本主
義を攻撃し、自分たちアーティストも難詰する。
そんな彼らが追求する「幸福」が一般的なアメリ
カ人のそれとは大きく異なることは当然だろう。
あっけらかんとした笑顔のアメリカン・ドリーム
はここにはない。ここにあるかもしれないのは、
流浪の米国人にしか語りえないあまりにも息苦し
い「幸福」のかたちだ。



Photo: Andrej Lamut

Concept, Text & Direction: Pavol Liska and Kelly Copper

Cast: Luke Thomas Dunne, Ida Hellsten, Bence Mezei,
Ana Stefanec Knez, Tamás Tuza, Giorgia Belotti
EN-KNAP Artistic Director: Iztok Kovač
Rehearsal Director: Nohemi Barriuso
Light Design: Luka Curk
Costume Design: Katarina Škaper
Technical Team: Leon Curk, Gal Škrjanec Skaberne, Špela Škulj
PR Photo and Video: Andrej Lamut
Executive Producer: Karmen Keržar
Public Relations: Nina Smerköl
Production Manager: Marjeta Lavrič
Production: EN-KNAP Productions
Co-production: Théâtre de la Ville and Steirischer Herbst
Support: City of Ljubljana - Department of Culture & the Ministry of Culture of the Republic of Slovenia

Technical Manager: So Ozaki
Stage Manager: Takashi Kawachi
Interpretation: Shiomi Watanabe
Translation, Surtitles: Mika Eglinton
Video Documentation: Daisuke Yamashiro
Photography: Masahiro Hasunuma

Curator: Chiaki Soma (Aichi Triennale 2019)
Production Manager: Sayuri Fujii (Aichi Triennale 2019)
Production Coordinator: Tsubasa Shimizu (Aichi Triennale 2019)
Production Assistant: Kazuki Sugai (office cassini)

Presented by Aichi Triennale Organizing Committee
Co- Presented by Nagoya City Cultural Promotion Agency
(Nagoya City Performing Arts Center)

コンセプト・テキスト・演出: パヴォル・リシュカ、ケリー・カッパー

出演: ルク・トーマス・ダン、イダ・ヘルスティン、ベンツェ・メゼイ、
アナ・ステファネツ・クニース、タマーシュ・トゥザ、ジョルジア・ベロッティ
エンクナップ芸術監督: イストク・コヴァチ
リハーサル監督: ノエミ・バリウソ
照明デザイン: ルカ・ツルク
衣裳デザイン: カタリナ・スカペール
技術スタッフ: レオン・ツルク、ガル・シュクリアナツ・スカペルネ、
シュベラ・シュクイ
広報写真・映像: アンドレイ・ラムート
制作統括: カルメン・ケルザ
広報: ニナ・スメルコール
制作: マリエタ・ラウリッチ
製作: エンクナッププロダクション
共同製作: バリ市立劇場、シュタイヤーマルクの秋のフェスティバル
カンパニー助成: リュブリャナ市文化局、スロベニア共和国文化省

技術監督: 尾崎聡
舞台監督: 河内崇
通訳: 渡部潮美
字幕翻訳: エグリントンミカ
記録映像: 山城大督
記録写真: 蓮沼昌宏

キュレーター: 相馬千秋 (あいちトリエンナーレ2019)
制作統括: 藤井さゆり (あいちトリエンナーレ2019)
制作: 清水翼 (あいちトリエンナーレ2019)
制作アシスタント: 菅井一輝 (office cassini)

主催: あいちトリエンナーレ実行委員会
共催: 公益財団法人名古屋市民文化振興事業団 (名古屋市芸術創造センター)

「あいちトリエンナーレ2019」ハフォーミングアーツ AICHI TRIENNALE 2019 / Performing Arts

キュレーター Curator

相馬千秋 SOMA Chiaki

アシスタントキュレーター Assistant Curator

藤井さゆり FUJII Sayuri

コーディネーター Coordinator

清水翼、村松里実 SHIMIZU Tsubasa, MURAMATSU Satomi

テクニカル・ディレクター Technical Director

尾崎聡 OZAKI So

票券 Ticket Administration

山崎佳奈子 YAMASAKI Kanako

翻訳 Translation

Art Translators Collective

(相磯展子、ベン・ケガン、リアン・キャンライト)

Art Translators Collective

(AISO Nobuko, Ben CAGAN, Lillian CANRIGHT)

編集・執筆 Editor/Writer

鈴木理映子 SUZUKI Rieko

編集: 鈴木理映子

デザイン: コバヤシタケシ (SURFACE)

印刷・製本: 藤原印刷

あいちトリエンナーレ2019 情の時代 2019年8月1日 [木] - 10月14日 [月・祝]

主な会場: 愛知芸術文化センター、名古屋市美術館、名古屋市内のまちなか (四間道・円頓寺)
豊田市 (豊田市美術館及び豊田市駅周辺)

芸術監督: 津田大介 (ジャーナリスト/メディア・アクティビスト)

主催: あいちトリエンナーレ実行委員会

助成: 担保ジャパン日本興亜「SOMPO アート・ファンド」(企業メセナ協議会 2021 Arts Fund)
公益社団法人企業メセナ協議会 2021 芸術・文化による社会創造ファンド
一般財団法人地域創造

AICHI TRIENNALE 2019: Taming Y/Our Passion

August 1 (Thursday) to October 14 (Monday, public holiday), 2019

Main Venues: Aichi Arts Center, Nagoya City Art Museum, Nagoya City (Shikemichi and Endoji)
Toyota City (Toyota Municipal Museum of Art and venues in the vicinity of Toyotashi station)

Artistic Director: TSUDA Daisuke (Journalist / Media Activist)

Organizer: Aichi Triennale Organizing Committee

Supported by Sompo Japan Nipponkoa Insurance Inc. [SOMPO ART FUND]
(Association for Corporate Support of the Arts, Japan: 2021 Fund for Creation of Society by the Arts and Culture), Association for Corporate Support of the Arts, Japan: 2021 Fund for Creation of Society by the Arts and Culture, Japan Foundation for Regional Art-Activities

